

若者ケアラーの包括的支援に関する研究 —高等教育で学ぶ若者に焦点をあてて—

森田 久美子

I. 研究の背景と目的

少子高齢者が進む中、ケアラーのライフステージや個人の状況から生じる様々なニーズに考慮した、支援を構築していくことが求められている。この多様なライフステージに応じた支援の検討が必要なケアラーのグループに、若者ケアラー (young adult carers) がある。本研究では、高等教育で学ぶ若者ケアラーに焦点をあて、ケアの実態を把握することを通じて、若者ケアラーの社会的自立の促進に向けた包括的支援のあり方を明らかにしていくことを目的としている。

なお、本研究では、若者ケアラーの用語を、「病気や障害のある家族員にケアや手助け、見守りが必要な場合に、ケアや援助、サポートを無償で行っている (または行っていく予定のある) 18 歳以上 24 才以下の者」との意味で用いている。

II. 研究方法

本研究では次の 3 つの方法を用いている。

第一に、政府統計の二次集計である。若者ケアラーの規模と構成を把握するために、平成 8 年及び平成 13 年、平成 18 年、平成 23 年の「社会生活基本調査」のデータ及び平成 8 年及び平成 13 年、平成 18 年の「社会生活基本調査」の匿名データの二次集計を実施した。

第二に、高等教育で学ぶ若者ケアラーを対象とした量的調査である。高等教育で学ぶ若者ケアラーのケアの実態を明らかにするために、自記式

質問紙調査を実施した。調査対象は、一般社団法人日本精神保健福祉士養成校協会の会員校 (専門学校、大学、大学院) 9 校で学ぶ学生である。

第三に、高等教育で学ぶ若者ケアラーを対象とした質的調査である。若者ケアラーがケアと学生生活を両立するプロセスを明らかにするために、支援ニーズの高い高等教育で学ぶ若者ケアラー 8 名を対象に面接調査を実施した。そこで得られたデータは、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した。

III. 研究結果

1. 若者ケアラーの規模と構成

平成 23 年の若者ケアラーの規模は 225 千人、介護者比率は 1.8% と推定された。また、平成 8 年から平成 23 年にかけて、若者ケアラーの介護者比率は漸増傾向にあることが判明した。

また、若者ケアラーの多くを占める女性の教育状況は、高校在学または高校卒業の者が中心であるが、平成 13 年から平成 18 年にかけて大学または大学院に在学している者の比率が増加していた。ケアラーの中心を占める女性の成人への移行経路の一つは、高等教育であると考えられた。

2. 高等教育で学ぶ若者ケアラーのケアの実態

高等教育で学ぶ若者における介護者比率は 85% であり、特に女性で高くなっていた。

また、若者ケアラーの家族構成は、祖父母と同居する者が多く、単身が少なくなっていた。ま

た、ケアをしている相手は、祖父母が6割弱であり、親やきょうだいも4割、親は精神疾患のある者が、きょう代いは知的障害のある者が多くなっていた。また、担っているケアは、感情面のサポートや家事、短時間のケアが多くなっていた。

さらに、若者ケアラーの約1割半がケアをすることにより学校生活上の困難を感じていた。また、6割弱が学校内にケアをしていることを知っている人は「いない」と答えていた。

3. 高等教育で学ぶ若者ケアラーのケアと学生生活との両立のプロセス

分析の結果、35概念、9サブカテゴリー、6カテゴリーが見出され、以下のストーリーラインを描くことができた。

「高等教育で学ぶ若者ケアラーのケアと学生生活との両立のプロセスは、＜母親・家族員の健康損失の脅威＞から始まる。高等教育で学ぶ若者ケアラーは、【家族介護の自明視】の影響を受け、【ケアの代替不可能】から【ケアへの没入】をしていく。そして、【学生役割増大への対応】と【ケアへの没入】についての【同時充足圧力】を受けられるようになる。【同時充足圧力】を受けた高等教育で学ぶ若者ケアラーは、【家族介護の自明視】により【動けるのは自分一人】の対応を行うが、【家族の個別性重視】により徐々に【一人で頑張らないケアスタイルの形成】を行うようになる。そして、【動けるのは自分一人】と【一人で頑張らないケアスタイルの形成】を行きつ戻りつしつつ、【一人で頑張らないケアスタイルの形成】により【同時充足圧力】を調整できるようになっている」。

6. 考察及び結論

若者ケアラーはこれまで「隠された」存在であったが、わが国にも一定数の規模で存在し、高齢の祖父母のケアのみならず、病気や障害のある親や知的障害のあるきょうだいのケアを行い、貢献している。一方、若者ケアラーのしているケアは家事や感情面のケアなどのソフトなケアや短時間のケアが多く、成人のそれとは異なるために、その存在や貢献は周囲の人には見えず、承認されづらくなっている。したがって、若者ケアラーの包括的支援は、まず若者ケアラーを取り巻く学校、福祉、医療などの各機関が若者ケアラーのしているケアの特徴を理解し、若者ケアラーのしている貢献を認めることから始められる必要がある。それによって、若者ケアラーが発見されやすい環境を醸成していくことが課題となっている。

また、高等教育機関では、ケアラー学生のための相談支援体制を整備することが求められる。若者ケアラーはケア役割と学生役割との役割間葛藤である【同時充足圧力】により、学生生活継続の困難を経験する。また、これに対し【動けるのは自分一人】の対処をし、【一人で頑張らないケアスタイルの形成】を通して【同時充足圧力】を調整する力を蓄積している。したがって、ケアと学生生活との両立の支援にあたっては、【一人で頑張らないケアスタイルの形成】を促進する本人及び環境の力量の蓄積を支援していくことがポイントであると考えられる。

今後の課題は、ニートや職業訓練にある若者ケアラーの実態を把握し、より総合的かつ包括的な若者ケアラーの支援策を検討していくことである。